



桜の舞い散る季節

テトラクリスタルアイランド 泉の庭園

冬の寒さ段々収まってきた頃。

テトラクリスタルアイランドに積もっていた雪が段々解け始めた頃。

ストレンジャー達は泉の庭園へやってきた。

「うーん。 もう冬は終わりだな。」

ピスフリーは歩きながら体を伸ばしつつ言った。

「そうね。 ちょっと外に居づらかった季節も、もう終わりね。」

「もう春なんてね。 冬が短かった気がするわ。」

アルドールとジョイも口々にそう言った。

「そうになると、これで全員が四季の儀式を行ったことになるのか。」

ストレンジャーが不意に言った。

「そういえばそういうことになるわね。」

「もう一周したんだ。 やっぱり早いわね。」

「確かにな。」

4人は仲良く会話をしていると、泉の庭園に到着した。

「さて、毎度の場所に到着だな。」

いつもストレンジャー達四神が集う、泉の庭園。

本日は雪景色が広がっていた。

「頑張ってね、ストレンジャー」

「ああ。」

ストレンジャーは3人に見送られ、儀式を行う泉の中へ入っていった。

「行くぜ！！」

そして、泉の上での龍の舞が始まった。

舞を踊っていると、いつもの儀式同様に、ストレンジャーの足元には段々桜の花びらが出始めた。

そして、舞が終わると同時に、桜の花びらがいっせいに空へと舞い上がった。
花びらは空へ飛び出すと、ゆっくりと舞いながら地上へ戻ってきた。

「お疲れ様ー」

ストレンジャーは儀式を終え、3人の下へ。

「かっこよかったわよストレンジャー」

「とってもね。」

「本当だ、おまけにこんなに綺麗な装飾付きだもんな。」

ピスフリーは空から降ってくる桜の花びらを見つつ言った。

「ありがとう皆。」

ストレンジャーは舞を踊ったあとも、そこまで息を切らさずその場に立っていた。

「・・・桜、か。」

そんな四神達の様子を、島の森から伺っていたコレージは呟いた。

「こんな季節が、また来るなんてな。」

コレージは桜の花びらを見つつ言った。
手の平を出すと、一枚の花びらが乗った。

「・・・ いまいますい。」

コレージは持っていた花びらを、剣で切ってしまった。
切られた花びらはそのまま地面へ。
そのままコレージは、森へと入っていった。

東側 砂浜エリア

4人は一通りの交流を終えると、それぞれの領地へ戻っていった。
ストレンジャーも同様に戻っていたが、いつもの寄り道もしていた。

「お、庭園が。」

ストレンジャーが趣味で作った庭園には、先ほどの桜の花びらが落ちており、綺麗な桃色で地面を染めていた。

「綺麗。 花も木も、この季節が一番似合うな。」

ストレンジャーは水の入ったジョウロを持ち、花へ水遣りをした。
ジョウロの水は、先ほどの儀式ですべて溶けた、雪解け水だ。
普段使っている水とは違い、花にやるといつも以上に綺麗に見せてくれた。

「よし。 こんなもんかな。」

ストレンジャーは水をやり終え、花を見つつ言った。

「やはりここにいたか。」

ふとストレンジャーの背後から声がした。

「ああ、毎日欠かさずにやる仕事だからな。 コレージも良く来るようになったな。」

ストレンジャーは振り返らずにそのままの立ち位置で言った。

「初めて出た強者のいる島からな。 そいつの様子を見ることが、俺の日課ともいえるな。」

「相変わらずだな、お前は。」

「お前もな。」

ストレンジャーは少々苦笑しつつ言った。

コレージは特に表情は変えず、いつもの顔で言った。

「花の世話か。 お前、そんなことしてて楽しいか？」

コレージはストレンジャーが毎日手入れをしている花々を見つつ言った。

「ああ、楽しいさ。 春は俺の好きな季節ともいえるからな。」

「そんないい季節には思えないがな。 こんな季節。」

「どうしてだ？ 争いの少ない、平和な時期だと、俺は思うぜ。」

「それが気に食わないんだ。」

ストレンジャーの意見に反発したコレージ。

声のトーンは変わらないが、機嫌がよくない様子。

「平和などと、落ちぶれて毎日を生活する。 俺には考えられないな。 世界のどこでも争いは起こる。 そして負の感情が連鎖的に起こり、人はそれに支配され、そして壊れる。 甘いことを言っているやつほど、信用できない。」

「確か言うだけなら簡単だな。 行動もしないで、甘い生活を送っているほど、そういうことのきっかけになるからな。」

「だからこそ信頼できないんだ。 俺は。」

コレージはストレンジャーの方から顔をそらしつつ言った。

「そんな気分させる、春が、俺は大嫌いだ。」

コレージはそういうと、姿を消した。

コレージが姿を消した後、ストレンジャーはジョウロを地面に置き、コレージがいたと思われる方を見た。

『お前の言動は、いつも凍てついているな。』

ストレンジャーはそう思いつつその方向を見ていた。

「あ、おかえりなさいストレンジャーさん。」

ストレンジャーが家へ帰ると、ビリーブが外で出迎えた。

「ああ、ただいまビリーブ。」

「？　どうかしましたか？」

ビリーブはストレンジャーの表情を見つつ言った。

「いや、なんでもないよ。」

「そうですか。」

ビリーブはそれ以上は何も聞かなかった。

「そうだ、これからちょっと出かけてくるから、留守を頼むぜ。」

不意にストレンジャーはビリーブに言った。

「えっと、どちらに？」

「ちょっとトロピカルアイランドにな。家の掃除をしばらくしてなかったから。」

「わかりました。行ってらっしゃいませ。」

ビリーブの言った事を聞きつつ、ストレンジャーは翼を広げて泉の庭園へ向かって飛んで行った。

泉の庭園へ着くと、ワープゾーンを作り、出かけていった。

トロピカルアイランド

ストレンジャーがワープゾーンを抜けると、トロピカルアイランドに到着した。以前入り口だった、月明かりの実の木の前に。

「久しぶりに来たけど、やっぱり自然が豊かだな。」

ストレンジャーは島に着地すると、以前まで住んでいた家へ向かっていった。

ストレンジャーがしばらく家として住んでいた家に着くと、入り口を開けた。家は以前と変わらず、家具が置かれていた。だが少々埃が溜まっていた。

「やっぱりしばらく放置すると汚いな。ま、頑張るか。」

ストレンジャーは手に自分で作った竹箒を召還し、まず掃き掃除を開始した。強く床を掃くと、砂と埃が舞うため、静かに掃き掃除。

「えっと、次は拭き掃除か。」

掃き掃除を終えると、今度は持ってきた雑巾を出し、拭き掃除を開始した。

そして掃除すること3時間・・・

「よし！ 完璧だな。」

ストレンジャーは掃除を終え、部屋を見回した。
部屋は来たときと比べるととても綺麗になった。
机や棚にはもちろん、埃は無い。

「さてと、帰るかな。」

ストレンジャーは掃除を終えると、家から出て扉を閉め、元来た道に戻っていった。

そしてトロピカルアイランドのフルーツを少々持って、テトラクリスタルアイランドへ戻っていった。

襲い掛かった事件

テトラクリスタルアイランド 泉の庭園

トロピカルアイランドにある家の掃除を終え、ストレンジャーは手にフルーツを抱えて島へ戻ってきた。

島はすでに夕方を迎えており、島がオレンジ色に染まっていた。

「おおっと危ない。」

ストレンジャーはフルーツを危うく落としそうになり、フルーツを持ち直した。

「さすがに多すぎたかな。 持ってくるにはは。」

両手でたくさんのフルーツを持ってきたため、前方はあまり見えず、少々危ない。

「お帰りなさいストレンジャーさん。」

ストレンジャーがゆっくり家へ向かって歩いていると、前方から声がした。

「ビリーブか？」

「はい。 ずいぶん大荷物ですね。 手伝います。」

ビリーブはストレンジャーの持っていたフルーツを取り、半分ぐらい持った。

「ありがとう、ちょうど困ってたんだ。」

「どういたしまして。 そういえばコレって、トロピカルアイランドのフルーツですか？」

ビリーブは持っていたフルーツを見つつストレンジャーに問いかけた。

「ああ、せっかく島に行ったんだからな、食べたくなくて持って帰ってきたんだ。」

「確かにおいしそうでもんね。 いい香り。」

ビリーブはフルーツの香を嗅ぎつつ言った。

「じゃあ家に帰ろうか、母さんが待ってるだろうから。」

「はい。」

二人はフルーツを持って、家へと帰っていった。

ストレンジャーとビリーブが東側のエリアへ戻っていくと、泉にコレージが現れた。

「落とし物か。」

だが泉には、1つフルーツが落ちていた。

コレージと同じ、橙色をしたオレンジが。

コレージはそれを拾い、食べた。

「・・・おいしいな。」

コレージはオレンジを食べつつ、森へと進んでいった。

そしていつも寝ている森の一角にある石の上に乗れ、寝てしまった。

コレージがこの島に現れる前、コレージは別の場所で過ごしていた。

オセであるコレージは、とあるマスターのそばで護衛をしつつ毎日を過ごしていた。

時にはマスターの命令で強者を相手に戦い、マスターのために戦った。

時には同じチームの仲間と共に。

だがある日、事件が起きた。

それは、マスターのそばを離れ、少々遠出をしていた日。

遠出の用を済ませ、マスターの元へ帰ってきた。

だがマスターのいる部屋で話し声が、

「そういうことで、あいつらを全員釈放し、自由と引き換えに殺せ。」

コレージは盗み聞きをするつもりは無かったのだが、話を聞いてしまったのだ。

『マスターに 殺られる。』

コレージは話の内容から推測し、結論を出した。

「だれだ！！」

部屋にいたマスターはコレージのいる方角を見つつ言った。

コレージは素直にマスターに見える角度へ。

「お前か、今の話を聞いてしまったみたいだな。」

コレージは黙ったままその場に立っていた。

「すまないが、消えてもらう。」

マスターはそういうと、そばにマスターの刺客と思われる影に言った。

「やれ。」

そういうと影達はコレージに向かって襲い掛かってきた。

コレージはもちろん逃げ出した。

足の速さはほぼ同じ、距離が変わらずコレージは島中を逃げ回った。

他のマスターに使えていたもの達も襲われ、亡骸が時々落ちていた。

時にはコレージの元へ現われ、刺客と同じ行動を取った者もいた、裏切りとして。

それでもコレージは敵を払い、逃げた続けた。

だが方向を間違い、崖へと到着してしまった。

「しまった。」

コレージは崖で移動することが出来ず、海を背中に刺客と向かい合った。

「散々手こずらせてもらったな。」

「ここで終わりにさせてもらおう！」

刺客はコレージに襲い掛かった。

コレージは刀を手に刺客と戦った。

だが少しの間の悪あがきにしかならず、コレージは相手の一撃を胸に喰らってしまった。

「クッ、」

コレージはその場に崩れ、切られた傷口を押さえた。

だが傷口を抑えても切り傷が広すぎ、血が流れる。

傷口を押さえている手の手袋は、段々と血の色に染められていく。

「終わりだ。」

刺客はコレージに止めを刺しに向かってきた。

『一か八か！』

コレージは相手の攻撃を避け、海へと身を投げた。

ドボン！！

コレージは海へと転落し、水しぶきが上がった。
海の水は転落した部分が、だんだんと赤く染まっていた。
刺客はその後しばらく海を見たあと、引き上げていった。

海へと落ちたコレージはしばらく、波に身を任せて漂った。
胸の傷は海水に触れ痛みが走ったが、徐々に傷が塞がり、痛みは無くなった。

『マスターや皆に裏切られたのか。』

コレージは自分の身に起こった事を確認した。
体の傷は癒えたものの、心に大きな傷を残した。

そしてしばらく海を漂い、無人島へたどり着いた。

しばらく無人島で生活をし、コレージは旅を決意した。

『たとえどんな刺客が現れたとしても、俺は殺られたりしない。 強者と戦い、俺は強くなって見せる。』

そう決意したコレージは、持ち前の脚力で海を飛び、島へ島へと渡り歩いた。

島の強者と戦い、倒し、島を巡る毎日だった。

だがある日、ふと思った。

『殺すだけじゃダメだ、俺には何かが足りないんだ。』

コレージは考えた。

今までに大勢の強者と戦い、相手に血を流させてきた。
だがそれが本当にすることでは無いと悟った。

『何か足りないから、俺はあの時切られたのか。』

コレージはあの時に出来た傷を見つつ思った。

胸に出来た縦一本の、大きな切り傷。
今は塞がっているため、血が流れることは無い。

『俺に足りないものを、探そう。』

コレージは新たな目標を決め、再び旅を開始した。

そして、ストレンジャー達のいる島へとやってきた。
島の強者であるストレンジャーと戦った。
だが予想外にも、コレージは戦いに敗れた。

『強い。』

そこに立って自分に剣先を向けている相手は、今まで戦ってきたどんな敵よりも強かったのだ。
コレージは戦いに負け、ストレンジャーに言った。

「俺の負けだな。 殺るがいいさ。」
「なに言ってるんだ？」

だがストレンジャーは剣を下ろし、コレージが戦いに使っていた剣を拾い、コレージの元へ。

「お前は最初から、俺を殺す気は無かったんだろ？ だったら俺もお前を殺すことなんてしないよ。」

「お前は何かを求めている、それだけだからな。」

コレージは目を覚まし、石の上から起き上がった。
空にはまだ星空が広がっていた。

『俺には、何が足りないんだろう・・・』

コレージは星空を見つづけた。

テトラクリスタルアイランド

島にいつもの日差しが降りそそぎ、朝がやってきた。
島には暖かい春風が吹いており、本格的な春が始まっていた。
そんな朝、ストレンジャーはいつもの場所へ。

ジョウロを片手に、花へ水をやっていた。

『そういえばこの島には、桜が無かったな。』

ふとストレンジャーは思い、ジョウロを地面へ置いた。
ストレンジャーは近くにあった植木鉢に土をいれ、両手でそれを持った。
そして目を瞑り、願った。

『素敵な春の兆しを、この土の中へ。』

すると植木鉢に芽が生えた。
まだまだ小さい、芽が。

「よし。」

ストレンジャーは植木鉢を置き、その芽にも水をやった。

「綺麗な花を、見せてくれよな。」

ストレンジャーは土の中から出た芽に向かって言った。

「始めてみたな。 青龍の力を使っているところを。」

ふと背後からコレージの声がした。

「余り使うことが無いからな。 乱用しても仕方ない。」

「有り余る能力にも、困ったことがつき物だな。」

コレージはそういった。

「で、その能力を使って、何をしてたんだ？」

「ああ、桜の木を作ろうと思ってな。」

ストレンジャーは先ほど出した芽を見つつ言った。

「桜・・・」

「そう、桜。 春にはつきものだからな。 コレージは、どんな花が好きなんだ？」

「特に無いな。 好きな物が無いくらいだからな。」

「そっか。」

ストレンジャーはその場から立ち上がった。

「そういえば、昨日のフルーツ。 おいしかったか？」

「フルーツ、ああオレンジか。 好意があって置いたのか。」

「まあな、俺の以前住んでいた場所のフルーツだ。 おいしかったら？」

「まあ・・・」

コレージはストレンジャーからの問いに素直に答えた。

「場所はトロピカルアイランドだ。 せっかくだから行ってみたらどうだ？ まだ他にもいろいろ実がなってるぜ。」

ストレンジャーはそういうと、家へと戻っていった。

コレージはその後、森へと消えていった。

「あ、お帰りなさいストレンジャーさん。」

ストレンジャーが家へと戻るとビリーブが外にいた。

「ただいま、ビリーブ。 何してたんだ？」

「今日もお掃除です。」

ビリーブは雑巾を見せつつ言った。

「俺も手伝っていいか？ することが終わったから。」

「いいですよ。 ではもう一枚取ってきますね。」

「あ、いいよ。 自分で取って来るから。 母さんに言えばくれるかな。」

「ハイ。」

ストレンジャーは一度、家へと戻っていった。

ビリーブは再び1階の窓拭きを開始した。

ストレンジャーは母龍から雑巾を貰い、ビリーブでは手が届かない高い窓拭きを開始した。

一方コレージはというと、ストレンジャーに進められたトロピカルアイランドへ向かっていた。
持ち前の脚力で島を飛んで。

トロピカルアイランド

しばらく島を渡り、コレージはトロピカルアイランドへ到着した。

「ここか。」

コレージは島を回り、木になっている様々なフルーツを見ていた。

そして一つの木の前で立ち止まった。

それは、昨日食べたオレンジの木だった。

コレージはオレンジを取り、食べた。

「・・・おいしいな。」

コレージはいつの間にか、にこやかな表情をしてオレンジを食べていた。

その後コレージは、しばらく島のフルーツを食べ歩いていた。

そして時間が過ぎ、夕方

コレージは前までストレンジャーが過ごしていた家へと到着した。

「家？」

コレージは家の扉を開け、中へ入った。

家の中には家具が置かれており、隅にはやしの木が生えていた。

「家、みたいだな。でも誰の。」

「俺が少し前まで住んでいた場所だぜ。」

すると入り口にはストレンジャーが立っていた。

「おまえが住んでいた？」

「ああ、今住んでいる島は、昔侵略軍に襲われ、俺はアルドール達と共に島を脱出したんだ。

で、たどり着いたのがこの島。」

ストレンジャーは家へ入りつつ言い続けた。

「それからしばらく、ソニック達と生活して、アルドールと再会して、島を自分の手で取り戻したんだ。戦いを終えて。」

「じゃあおまえは昔、ここで一人。」

「ああ、生活してたんだ。」

ストレンジャーは家具に手を置きつつ言った。

「急な事だったからな、一人で寂しかったし、過ごせるかどうかわからなかった。でも。」

ストレンジャーはコレッジの方を向いた。

「昔があるから、今があるんだと、俺は思うんだ。」

「昔が、あるから・・・」

コレッジは呟いた。

「コレッジはどうだったかは俺にはわからない。でも、俺でも出来ることがあれば、コレッジのために何かをしたい。」

「・・・」

ストレンジャーはコレッジの元へ。

「俺なんかのために、何をするんだかな。」

コレッジはそう言うと、外へ出て行った。

ストレンジャーも外へ。

外へ行くと、空は夜空だった。

だが平和な一時は送れそうに無かった。

「ようやく見つけたぞ！」

外へ出ると、そこにはコレージには見覚えのある二人が立っていた。

「貴様ら！！」

そこには、昔コレージを殺そうとした二人が立っていた。

「ったく、手こずらせやがって。」

「俺たちの面目が丸つぶれた。」

二人は口々に言った。

相手のために出来る事

トロピカルアイランド

ストレンジャーが昔住んでいた家を出ると、目の前にはコレージにとって、出会いたくない二人が立っていた。

「貴様ら！」

コレージは全身の毛を逆立てながら言った。
そこには、コレージを殺そうとした、マスターの刺客が立っていた。

「散々探させたあげく、ずいぶんと強がるようになったもんだな。」
「ああ、所詮はただの豹か。」

二人は見下した口調をしつつ言った。

「コレージ。 こいつらは。」
「昔俺を殺そうとしたやつらだ。」

コレージは敵を見つつ言った。

「殺す・・・ だって・・・」

ストレンジャーは相手を見つつ言った。

「どうしてそんなことを！」

ストレンジャーは敵に向かっていった。

「おおっと、ずいぶんと変わった敵がいたもんだな。」

敵の一人がストレンジャーを見つづ言った。

「お前ら、どうしてコレージの命を狙うんだ！」

ストレンジャーは再び問いかけた。

「まあ簡単に、依頼があったから、とでも言っておこうか。」

「依頼 だって？」

「ああ、こいつのマスターが、俺たちに殺しを依頼してきたんだ。」

「『あいつらが生涯護衛をしなくていい代わりに、殺せ』とな。」

敵は冷静に言った。

「ずいぶんと変わった依頼だがな。」

敵の一人は言った。

「そんなわけだ。 あいつらと同じところへ、コレージ、お前も行かせてやるよ。」

敵はそういうとコレージに襲いかかった。

カンッ！！

コレージはすでに刀を構え、敵の攻撃を受け止めた。

「だが、やられるわけにはいかねえな。」

「あの時同様に悪あがきか。 上等！！」

敵はコレージの守りを払い、再び剣を片手に襲い掛かった。

コレージは敵二人からの猛攻をすべて受け止め、相手に攻撃を仕掛けた。

「甘いな。」

敵はそれを避け、コレージに攻撃を仕掛けた。

「同じ言葉を、返させてもらう。」

コレージも同様に攻撃を避け、そう言い放った。

そんな凄まじい攻防戦をストレンジャーの目の前で繰り広げられていた。

『あいつ、相手の事が信用できないって言っていたのは、このことだったんだ。』

ストレンジャーは相手の事を見つつ言った。

『コレージのマスターが裏切り、71人の部下達を殺させたのか。』

ストレンジャーは頭を垂れ、目に涙を浮かべた。

「・・・だが、コレージのことは殺させないぜ！！」

ストレンジャーは手に剣を召還し、相手に襲い掛かった。

コレージを相手していた二人は、ストレンジャーからの急な攻撃を避けた。

「龍、邪魔をする気か？」

「手加減をしないぞ。」

「上等だ。」

ストレンジャーは剣を構え直しつつ言った。

「友人を倒させるわけには行かない！！ 裏切ったものからの刺客でも！！」

ストレンジャーは目に涙を浮かべつつ相手に襲い掛かった。

「仕方ない。」

相手はそういうと、コレージをもう片方に任せ、ストレンジャーの相手をした。

「お前、どうして俺たちの邪魔をする。」

敵はストレンジャーに攻撃をしつつ問いかけた。

「あいつは、仲間からの裏切り、死を実感している。 性格まで凍てついている。」

ストレンジャーは敵の攻撃を払い、敵に攻撃を仕掛けた。

「寒く、凍てつく記憶が、あいつの事を苦しめている。 だからこそ、」

敵は攻撃を受け止めた。

ストレンジャーはそのままの体制で言った。

「あいつの心に、春を送ってやるんだ！ 四神の一人、青龍として！！！！」

ストレンジャーは敵の剣を振り払い、敵に一撃を喰らわせた。

敵は攻撃を喰らい、霧となり消えてしまった。

ストレンジャーはコレージが相手をしている敵に襲いかかった。

「なるほど、オセ同様に強いと思ったら、青龍だったか。」

敵は二人からの攻撃を払いつつ言った。

「まあどの道、倒すことには変わらないな。」

敵はそういうと、向かってくる二人の攻撃を両手の剣で受け止めた。

「では、こうさせてもらおうか。」

敵はコレージの攻撃を払い、コレージの事を蹴り飛ばした。

「クッ！」

コレージは地面を転がり、やしの木に激突した。

「コレージ！！」

「次はお前だ。」

敵はそういうと、ストレンジャーの攻撃をコレージ同様に払い飛ばし、蹴り飛ばした。

ストレンジャーは蹴り飛ばされ、コレージ同様にやしの木に激突した。

相手はすぐにストレンジャーの元へ走って行った。

「クッ！」

「終わりだ。」

敵はそういうと、倒れていたストレンジャーに止めを刺した。

「！！！」

バタッ！

ストレンジャーは敵の一撃を受け、地面にうつ伏せになるように倒れた。

「！ ストレンジャー！！」

コレッジはその瞬間を見つつ言った。
そしてストレンジャーの元へ。

「ストレンジャー！」

コレッジはストレンジャーを揺すったが、ストレンジャーは目を開けなかった。

事件の真相

トロピカルアイランド

ストレンジャーはコレッジのために、相手を倒しにかかった。
だが一人を倒し、もう一人を倒そうとしたが、攻撃を受け倒れてしまった。

「ストレンジャー！！」

コレッジはストレンジャーの肩を揺すったが、ストレンジャーは目を開けなかった。

「貴様あああ！！」

コレッジはストレンジャーを抱えつつ敵を睨みつつ言った。

「ずいぶんとその龍の事を考えるな。自分を庇ったからか？」

敵はコレッジに向かって問いかけた。

「こいつ・・・いやストレンジャーは俺の事を考えて、ここまでしてくれたんだ。俺がどんなに冷たい態度であっても。」

コレッジはストレンジャーを見つつ言った。

「だからこそ、俺はストレンジャーを守りたかった。」

コレッジはストレンジャーを抱えたまま涙を流した。
コレッジの目から流れた涙は、ストレンジャーの顔に落ちた。

「安心しろ、死んではない。俺が倒すよう命じられたのは、お前たちソロモン王に従える72人の護衛たちだけだ。」

敵はコレージの様子を見つつ言った。

敵にそう言われ、コレージは意識の無いストレンジャーの胸に手を当てた。

すると手に、ストレンジャーの胸の中で動く心臓の鼓動が伝わってきた。

「・・・よかった。」

コレージはストレンジャーの無事を確認すると、ストレンジャーを地面に寝かせた。

「オセよ。 自分を生涯守ろうとした奴らを、どうして殺すのか。 お前は知りたくないのか？」

敵はコレージを見つついた。

コレージは黙ったまま立っていた。

「冥土の土産として教えてやる。」

敵は勝手に喋り始めた。

『依頼主。 どうしてそんなことをするんだ？』

依頼された敵二人は依頼主であるコレージ達のマスターへ問いかけた。

『まあ普通はおかしな依頼だな。 自分を守ってくれていた奴らを殺すんだからな。』

依頼主は表情を変えずに言った。

だがその表情には何か訳のある顔をしていた。

『ではどうして。』

『・・・あいつらは、俺に尽くしすぎた。』

依頼主は依頼した二人から視線をそらしつつ言った。

『俺が王になる前から、ずっとあいつらは俺に尽くしてきた。 いつなんときでも。』

『だったらどうして。』

『俺が受け継いだとき、父は言った。 【あいつらの主導権はお前に託す。 釈放するなりずっと護衛させるなり、好きにしろ。 だがお前が、あいつらに自由を与えるなら、力でそれを得させろ。 俺はそうして王になったんだからな。】 と。』

依頼主は涙を流しつつ言った。

『俺は、あいつらがずっと、血を流させる仕事ばかりさせるのが嫌だったんだ。 だから自由にさせてやりたかった。』

依頼主はハンカチで涙を拭きつつ言った。

『だから、お前らに頼む。 お前らを死なせることにもなるかもしれない。 俺に尽くしてくれた奴ら72人と、戦ってくれ。』

『・・・わかりました。 仰せのままに。』

敵二人は話を聞き、依頼の内容に承諾した。

『お前らに勝った奴らは、自由にしてやってくれ。 そして、そのあとに俺も殺してくれ。』

『仰せのままに。』

依頼主はハンカチで目から流れ出た涙を拭き、再度言い放った。

『・・・そういうことで、あいつらを全員釈放し、自由と引き換えに殺せ。』

「そういうわけだ。」

話された内容をすべて話し終わると、敵はコレージを見た。

「俺たちの依頼主が涙を流してまで、お前たちを自由にさせたかったんだ。 お前の盗み聞きした部分は、最後に過ぎない。」

「マスターが、俺たちを自由に・・・」

コレージはその場に立ったまま、再び涙を流した。

「マスター、自分が愚かでした。 私は、貴方の事を疑ってしまった・・・！！」

コレージは涙を流しつつ言い続けた。

「マスターがそこまで俺たちの事を・・・」

コレージは拭っても流れてくる涙を拭いつつ言った。

「マスターには、お前が海に落ち、残りのやつらを全員倒してから、冥界へ行って頂いた。 『ありがとう。』と涙を流してな。」

敵も少々涙ぐみながら言った。

「だが、雇われた仕事上、おまえを倒すまでだ。 72人全員を倒すのは、ずいぶんと手こずらされたがな。」

敵は漂々とした口調で言った。

「で、最後の1人が、オセであるコレージ・ザ・ウィッシャー。 お前だけだ。」

敵はコレージに刃を向けつつ言った。

「さて、それでは昔の仕事に終止符を打たせてもらおうか。」

相手は剣を構え、コレージを見た。

コレージの手には、すでに刀が握られていた。

「覚悟！！」

敵はコレージに向かって襲い掛かった。

カンッ！！

だがコレージは敵の攻撃を片方の刀だけで攻撃を受け止めた。

「俺はマスターの意思を受け継ぐために、お前と戦わせてもらう！！」

コレージは受け止めた敵の攻撃を振り払いつつ相手に言った。

「どっちが生き残るか！」

「勝負だ！！」

二人は夜空の広がる時間帯の戦いを開始した。

決戦の末

トロピカルアイランド

空に星と月が輝く空の下、コレージはトロピカルアイランドでの決戦を行っていた。
雇われた殺し屋に倒された、マスターのために、他の仲間たちのために。

「ハッ！！」

コレージは両手にそれぞれ刀を持ち、マスターが訳有りで雇った殺し屋と戦っていた。

「なかなかだな。」

殺し屋はコレージの攻撃を受けつつ言った。

「やはりあの時に倒しておくべきだったか、あの時とは比べ物にならないくらいの強さを持っているな。」

「ああ、あの時からずっと、修行の毎日だったからな。」

コレージの刀と殺し屋の剣がぶつかり合い、剣のぶつかる音が島に響いていた。

「俺は負けるわけには行かない。 マスターの願いのためにも、ストレンジャーのためにも！」

コレージは相手の剣を振り払い、体制を立て直しつつ言った。

「俺も雇われた以上、どんな相手であろうと、容赦はしない！！」

敵も剣を構えなおし、戦闘体制へ。

そして再び、剣と刀を交えた攻防戦が再び始まった。

両者は一步も譲らず、攻撃と防御を繰り返し、勝利を手にすべく戦った。

相手が攻撃を繰り返せば、武器でそれを防ぎ、反撃をした。
時には回避し、空中からの攻撃も繰り返した。

だが決着はなかなか付かず、段々と空が明るくなってきた。

「はあ、はあ、なかなかやるな。」

コレージは少々息切れをしつつ相手に言った。

「はあ、そっちこそな。 それでこそ倒すかがあるってもんだな。」

殺し屋も息切れしつつ言った。

「そろそろ止めを刺させてもらうぜ。」

「ああ、こっちもそのつもりだ。」

両者は深呼吸をし、呼吸を整えた。

「行くぜ！！」

「覚悟！！」

コレージは刀を構え、相手に切りかかった。

相手は剣でそれを受け止め振り払い、コレージを蹴り飛ばした。

コレージは吹き飛ばされつつも体制を立て直し、砂浜の上を滑りつつ着地した。

今度は殺し屋が攻撃体制になり、コレージに襲い掛かった。

コレージは攻撃を避け、回し蹴りを繰り返した。

だが殺し屋は、その攻撃をもう片方の手で受け止めた。

「結構な攻撃だが、甘いな。」

「それはどうかな！」

コレージは足をつかむ手を、両足で挟み、その場でサマーソルトをした。
相手は挟んだ足を振りほどけず、そのまま砂浜へと叩きつけられた。
持っていた剣は、その弾みで海へと投げ飛ばされた。

「チッ。」

「まだまだ行くぜ！！」

コレージは手を離し、今度は両手を砂浜につけ、スピニングバードキックを相手に繰り出した。
相手は座ったままの状態だったため避けることが出来ず、両手を顔の前でクロスし、それを防いだ。

だがコレージは攻撃を止めず、そのままの状態ですろえ、相手の両手の防御を両足でなぎ払い、相手の顔面へ蹴りをお見舞した。

相手は顔面に直の攻撃を受け、砂浜に倒れた。

そしてコレージは止めとして回った反動と勢いをプラスして、相手のボディに強烈なツインカカト落としを相手にお見舞いした。

ドスッ！

「クハッ！」

「さて、ご満足いただけただけかな？」

コレージは両手を砂浜につけていた位置に立ち上がり、敵に向かって言った。

「クッ　・・・さすが・だな。　こうも・連続で・攻撃が来る・とはな。」

敵は起き上がりつつ、口からにじみ出た血を拭いつつ言った。

ドサッ！

だがさすがに力尽き、砂浜に倒れた。

「俺の・負けだな。 やるがいいさ。」

相手は砂浜に倒れたまま、コレージに言った。

「残念だがそれは出来ないな。」

コレージは相手に言った。

「何で・だ？」

相手は起こせない体を起こそうとしつつコレージに問いかけた。

「もうこれ以上、相手の血を流させる理由は無くなったんだ。 俺はこの期を持って、殺すことはやめる。」

コレージは戦闘に使った刀をしまい、敵に向かって言った。

「お前には申し訳ないが、このミッションは失敗として、もっとマシな生活をするようにするんだな。」

コレージは海から顔を出した太陽を見つつ言った。

相手はゆっくりと起き上がり、コレージの姿を見た。

「仕方ない。 俺のやってきた仕事も、お前の言うとおりに、終わりにするしかないな。 相方はやられてしまったんだ。」

元殺し屋である敵は、砂浜に座ったままの状態で言った。

「でも、このミッションは完了だ。」

「なぜだ？」

コレージは相手の方へ振り返りつつ問いかけた。

「この依頼は、『ソロモン王につかえし72人と戦う事』だ。 倒す倒さないは含まれていない。」

「・・・ そうだったな。」

コレージは相手の言うことが正しいと判断し、再び朝日を見た。

「安心しろ。 もといた島には戻れないが、あの島にいるソロモン王に仕えていたほかの71人は生きている。 そこにいる龍と同じような倒し方をしたからな。 術を解けば再び歩き出す。」

「そうか。」

「さて、仕事は終わったんだ。 引き上げるとするか。」

元殺し屋であった相手は、ゆっくりと立ち上がり、マントを広げた。

「あ、そうだお前。」

「なんだ？」

コレージは帰ろうとしていた相手呼び止めた。

そして相手に向かって言った。

「・・・ありがとう。」

普段使ったことの無い言葉を言い表情が硬いが、相手に伝えた。

相手はその言葉を聞き届け、トロピカルアイランドを去って言った。

トロピカルアイランド

夜の中に繰り広げられていた長い戦いを終え、コレージは少し島の砂浜の上で仮眠を取った。相手の術にかかり、意識を無くしたストレンジャーをやしの木のそばに寝かせて。

「う、ううん。」

朝からしばらく時間が経ち、相手の術が解け、目を覚ましたストレンジャー体を起こし辺りを見渡すとコレージ以外の人影が無く、暖かい春の日差しがトロピカルアイランドに降り注いでいた。

「・・・コレージ？」

「目が覚めたみたいだな。 体は大丈夫か？」

そばにいたコレージがストレンジャーの体調を気にしつつ言った。

「ああ、体は特に以上は無いみたいだな。 普通に動くぜ。」

ストレンジャーはゆっくり立ち上がり、腕や足、羽が動く事を確認しつつ言った。

「あの時は驚いたぜ。 ストレンジャーが死んだ方と思った。」

「俺も死ぬかと思ったぜ。 あいつ、ずいぶんと変わった技を使ってきた。」

「吹き飛ばされて良く見えなかったんだが、何をされたんだ？」

地面に座ったストレンジャーに、コレージは問いかけた。

「ああ、相手が迫ってきて、何かを耳元でささやかれて、胸に手の平を当てられたんだ。」

「胸に攻撃したのか。」

「でも何を言っていたのかはわからなかったな。 呪文だったのか、俺に言ったのか。」

ストレンジャーは思い出しつつ答えを言った。

「まあ過ぎたことだから、もういいよ。」

「そういえばコレージ。」

ストレンジャーに呼ばれ、コレージはストレンジャーの顔を見た。

「なんだ？」

「初めて、名前を呼んでくれたな。 それに表情も明るくなった。」

ストレンジャーはコレージの事を見つつ言った。

「ストレンジャーが俺の事を気遣ってくれたおかげで、なれたんだと思う。 あの時ストレンジャーは言っただろ？ 『どの場所にも心にも、春を与えるのが俺の仕事だ』って。」

「そういえば言ったな。 俺の考えがそのまま口に出ちまったから。」

ストレンジャーは頬を掻きつつ、照れつつ言った。

「おかげで俺の心にも春が来たよ。 ありがとう。」

コレージは自分の胸に手を当てつつストレンジャーにお礼を言った。

「どういたしまして。」

コレージはストレンジャーの手を取り、立ち上がらせた。

「それで、ストレンジャーに気遣ってもらった俺は、お前のために何か出来ないか？」

「何でだ？」

コレージは不意に言ったため、ストレンジャーは少々疑問に思いつつ問いかけた。

「俺もそれだけのことがしたいんだ。 何でかわからないけど。」

「心に変化があったためかな。 何かをしたくなかったのは。」

「そうかもしれないな。」

「じゃあ。俺の考えていたこと込みで、してもらいたいことが一つあるんだ。」

「なんだ？」

ストレンジャーはそういうと、少し前に進みつつ言った。

「俺が前まで住んでいたあの家に、変わりに住んでもらいたいんだ。食料はこの島だけで十分にある。フルーツが主食になるかも知れないけどな。」

「特に主食とか好き嫌いは無いから気にするな。でも、そんなことでいいのか？」

コレージは一通り説明され、OKを出しつつ問いかけた。

「そんなことでもないよ。俺にとって大切な友人に住んでもらえるなら、俺も安心だからな。」

「わかった。その依頼、引き受けよう。」

「ありがとうコレージ。あ、そうだ。」

ストレンジャーは不意に思い出し、手の平を広げ、手の上にあるものを召還した。

それは、ストレンジャーが植木鉢の中の土に芽生えさせた、小さな命だった。

「それは。」

「あの時に、俺が作った桜の芽だ。あの時から少し成長してるから、もう地面に植えても育つはずだ。」

ストレンジャーは自分が少し前まで住んでいた家の近くにスコップを召還し、スコップで穴を掘り、桜の木を植えた。

「コレージの心に春が来た記念に。そして、俺たちが友達になった記念に。この桜の花を！」

ストレンジャーは桜の木の幹に手を当てつつ言うと、桜の木は急成長し、綺麗な桜が満開に咲

いた。

「すごい。 コレがストレンジャーの使える力。」

「ああ、俺が新しく手にした聖なる力だ。 自然の力と干渉し、命を作り成長させる。 青龍の力。」

ストレンジャーは咲いたばかりの桜から降ってきた、桜の花びらを手にしつつ言った。

「あらためて言うぜコレージ。 これからもよろしくな。」

「ああ、こちらからもよろしく頼むぜ、ストレンジャー。」

二人は新しく地球に芽生えた命の前で、握手をした。

「そうだコレージ、口笛から奏でる曲。 何か聞かせてもらえないか？」

「せっかくだしな。 いいぜ。」

コレージはストレンジャーの元から数歩離れ、口笛をかなで始めた。

すると暖かな春風がトロピカルアイランドへ吹かれ、桜の花びらが二人の下へ優しく振ってきた。

二人の仲を祝福するかのよう。

コレージが奏でたのは、暖かな春が来た事を、そして自分が変わった事を感謝する明るい歌、ラプソディーだった。

— E P I S O D E E N D —